

高齢者施設におけるアクティビティに関する研究 ～さくばらホームを中心として～

笠木 秀樹 (新見公立短期大学)

キーワード：高齢者、痴呆性老人、アクティビティ、演劇療法、さくばらホーム

I. はじめに

わが国における高齢化率は16.2%に達し、急速な高齢社会への進展が進んでいる。こうした高齢社会では、痴呆性老人や寝たきりなど要介護老人への対応のあり方が問われている。なかでも痴呆性老人の増加傾向は増加の一途をたどり、痴呆の問題は社会問題化となり、痴呆性老人の生活の活性化をうながす積極的な介護対策が求められてきた。このような社会的ニーズを背景にアクティビティ・ケアが注目されてきた。

アクティビティ・サービスについての研究は、(財) ぼけ予防協会(1996, 1997, 1998)が痴呆老人のアクティビティケアについての研究に取り組み、余暇生活開発・レクリエーション総合研究所(1997)が一番ヶ瀬康子らを中心にそのあり方についての概念規定を試み、その後、千葉和夫ら(1997, 1998)が事例を中心として考察している。しかし、これらの研究は一側面から、アクティビティ・サービスを捉えている事例が多くみられ、総合的な分析が望まれる。そこで本研究は、総合的な視点を持って、アクティビティ・サービスの現状を明らかにすることによって、アクティビティ・サービスのあり方を究明することにある。

II. 研究の目的および方法

本研究の目的は、高齢者施設におけるアクティビティ・サービスの現状を明らかにすることにある。研究の目的を達成するために、次のアプローチからすすめた。

1. 日本レクリエーション協会主催第42回福祉レク・ワーカースクーリング参加者および岡山県下から任意に抽出した施設を対象として、レクリエーションの認識モデルと生きがい援助PA-SR評価スケールの2種類の分析、分類の視点を使用して事例のアクティビティ・サービスの傾向分析を試みる。
2. 事例研究として演劇療法で著名な岡山県総社市のさくばらホームにおいて、平成11年10月から11月にかけて、職員による活動記録等の内部資料の調査、および職員への面接調査、入居者への面接調査をおこない、アクティビティ・サービスの望ましい条件を検討する。

III. アクティビティ・サービスの現状と活動分析

IV. さくばらホームにおけるアクティビティ・サービス

1. 施設の概要

岡山県総社市日羽に昭和56年9月に開設された特別養護老人ホーム(櫻井紀子ホーム長)で、定員100名、うち痴呆専用コーナーは22名、職員は60名である。

平成元年に痴呆老人の残存機能を最大限に引き出すと共に活性化を促す中心的プログラムとして演劇活動を導入し、実施されている。なお、組織は事務、厨房、医務、寮母のマトリックス組織として生きがい対策レクリエーション・リハビリ委員会が設置され、そのなかにおいても日レク委員会と行レク委員会を分離設置している。

2. アクティビティ・サービスの概要

集団生活援助の場における痴呆老人に対するケアポイントとして次の6点を示し、日常生活をより健やかに、生き生きと生活できるプログラムを作成している。

- ①静と動のリズム、適度な刺激、規則正しい生活サイクル、全身機能を動かす生活など生活リズムの構築。
- ②ケアワーカーとの情愛が育ちあう関係づくりを中心として、ともに生きている感覚が育つ環境づくり。
- ③なじみ関係を感じることができる生活空間、人環境、生活時間の確保。
- ④残存機の発見によって、繰り返して行なう生活行為・動作から残存能力を開発し、規則正しい生活動作に対する統一ケアを心がけるなど生活学習訓練。
- ⑤介護職員の視野にいて転倒などの事故防止、疾病の早期発見など目配りの行き届いたシステムづくり。
- ⑥楽しみながらできるケアの構築をめざした職員の痴呆観の育成。

3. 4つの生活プログラム

生活プログラムの特徴として下記の4つのタイムを設け、ケアワーカーが働きながら、ともに生きる時間、楽しみながら積極的に取り組むことができるようにしている。

- ①リズムカルタイム（10：00～11：00）
行事に必要な用具の製作、共同絵画、貼り絵、料理教室など興味を持って取り組めるグループ作業をとおして他の入居者と交流を図る。
- ②おしゃれタイム（13：30～14：00）
服装のチェックを行なうと共に、お化粧品等の身だしなみを整える。
- ③フレッシュタイム（14：30～15：00）
入居者や職員が創作したパワフル体操などによって、リズムに乗ってからだを動かすことをとおして他の入居者と交流を図る。
- ④ナイトタイム（19：30～23：30）
家族団欒に似たくつろぎのひと時として、演劇を中心として、茶菓を媒体に心身の軽い動的リズムを与えることによって、なじみ関係を深める。

V. まとめとして

認識モデルの分析視点を用いたアクティビティ・サービスの整理結果、および、生きがいPA-SR評価スケールの分析視点を用いた場合のアクティビティ・サービスの傾向についての整理結果と考察は、当日発表する。

なお、アクティビティ・サービスの問題点として、どの施設においても、人材や時間の不足があげられ、人材の確保と共にアクティビティ・サービスの計画的実施が望まれている。

さくばらホームの実践事例は、ひとつのモデルとなりうるものである。しかし、全国的に実践例がなく、比較検討の対象となっていないのが残念である。

今後、これらの問題点をさくばらホームの次年度の計画に生かすと共に、その評価を課題としたい。

この研究に際し、川崎医療福祉大学健康体育学科4年、小寺秀征君の資料整理、研究補助等の協力があったことを記す。